

令和4年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」  
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者支援室





## 発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々からの心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することで、犯罪被害者等への配慮や協力への意識の醸成に努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、多くの中学・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十二回目となります。

本コンクールの応募作品については、学ぶ教室を受講し、又は報道等により知り得たことなどを踏まえ、大切な命を守り、被害者を生ませず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から二万五千八百六十六点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。本冊子は、選考された作品のうち、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等とはもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和四年十一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 佐野 裕子

## 審査委員講評

本年度の「大切な命を守る」中学・高校生作文コンクールは、応募数が昨年度の約一・五倍となる一万五千点を超える作品が寄せられました。この応募作品を審査委員会が審査し優秀作品を選考したところ、いずれの優秀作品も命の大切さの理解をはじめ、犯罪被害者やそのご家族の心情、置かれていた状況等の理解のほか、犯罪被害者支援に関する意見、考えや実行していることがよく表れ共感が得られる内容となっていました。

これら優秀作品の中でも、犯罪の被害にあった後に犯人が捕って事件が解決しても、犯罪被害者やその家族、友人などはその後心苦しみが続くことを知り、「私にはいったい何ができるだろうか。」と自らに問いかけて考えた上で、犯罪被害者の心情を理解した行動を具体的に考えるなど、自分自身で大変勉強されていることに感動いたしました。

同時に、「命の大切さを学ぶ教室」などで講演を聴き、講師の辛く悲しい体験の話や涙し、自らの日々の行動を改め規範意識の向上につなげ、講師の話をもとに両親と話し合いを行ったり、飲酒運転による犯罪被害の悲惨な現状に触れ、一瞬にして家族を失った遺族の心情や置かれている状況について家族と対話することなどで命の大切さについて理解を深めていることに感銘を受けました。

また、突然家族を失った遺族の心の痛みや、遺族が自分を責める苦しみを抱え続けていることを講演で知るとともに、SNSでの誹謗や中傷の危険性と他人を思いやる気持ちの大切さを考えるなど現代社会の情勢を反映した作品や、被害者遺族が心に負った傷は一生消えず裁判がある度に辛い気持ちになるといふ講師の話に衝撃を受け共感したり、辛い体験や同じ思いをほかの人にもさせたくないという講師の思いに感謝の気持ちや述べられた作品がありました。いずれも他人への思いやりを強調するものであり、この他人を思いやる気持ちは犯罪被害者支援にとっても非常に大切であります。さらに、被害者やその家族の心情を理解して接することや寄り添うことについて、過去に自分が悩みを相談した体験と重ね合わせて、その大切さを訴える内容の作品もありました。犯罪被害者やその家族が誰にも話せずに悩み苦しむことがあることを知り、自分自身に置き換えて「自分ならどう支援するか。」と考え、相談された人が寄り添う大切さやカウンセラーに相談することが再び平穏な生活を取り戻すことにつながることを理解したことは、犯罪被害者支援のために大変重要なことのひとつです。

このほか、学校の活動で「生命のメッセージ展」に関わったことで、見に来た方々の意識の変化を感じ、誰もが命の大切さを考えるきっかけが必要だと思ったという作品や、「被害者のために何ができるか。」や「命はなぜ大切か。」について言及しつつ、遺族の立場を自分だったらと思いを及ばせ、被害者の心情や置かれた状況をより深く知った上で、具体的な取組を考えた作品もあり、いずれも感銘を受ける内容となっています。

改めまして、この優秀作品集が犯罪被害者支援に対する国民の皆様のご理解とご協力につながることを祈念いたします。

令和四年十一月

公益財団法人犯罪被害救援基金 専務理事 黒澤 正和

# 目次

## ☆中学生の部

### 【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・ 平等に与えられた命を守るために 更別村立更別中央中学校 三年 和田 一花 …………… 2

### 【文部科学大臣賞】

- ・ 大切ないのち 坂東市立岩井中学校 三年 古矢 心 …………… 4

### 【警察庁長官賞】

- ・ 自分の命と周りの命 棚倉町立棚倉中学校 三年 永澤 泰子 …………… 6
- ・ 命の大切さ 伊勢市立二見中学校 三年 玉村 琉之介 …………… 8
- ・ 誰かに相談する大切さ 豊後高田市立香々地中学校 三年 野田 香菜乃 …………… 10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・守りたいもの

学校法人仙台育英学園高等学校

三年

浅野 友里

………

14

【文部科学大臣賞】

・自分のために、他人のために

東京都立南多摩中等教育学校

五年

有賀 葉

………

16

【警察庁長官賞】

・命を守るために私たちができること

東京都立南多摩中等教育学校

五年

長谷川 薫杜

………

18

・命を思い出す

奈良県立西の京高等学校

三年

余 有果

………

20

・「命」を守るということ

高知県立高知丸の内高等学校

三年

濱田 あいみ

………

22

# 【中学生の部】

## 平等に与えられた命を守るために

(北海道)

更別村立更別中央中学校 三年 和田 一花

二〇〇一年六月八日に発生した「大阪教育大附属小学校児童殺傷事件」を私はふとした瞬間に思い出す。校舎内に出刃包丁を持った男が侵入し、児童十三名、教諭二名が重軽傷を負い、児童八名が死亡した無差別大量殺人事件を。

この事件を教訓として、私達生徒に「学校は決して安全ではない」こと、万が一の為に訓練を行うことなど学校安全に関わる様々な取り組みがされるようになったこととともに、この事件当時に小学校に通っていた児童や教職員・保護者の中には未だ心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症している

方々がいることを知った。また、「あの時あだったら」などのサバイバーズ・ギルト、つまり、「見殺しにしたという自責の念」、「犠牲者に対する罪悪感」に駆られている教員もいると知り、私は「死」とは犯人逮捕という事件の解決を迎えた後もずっと人々の心を取り巻いているものだと実感した。それは、犯人に対する憎しみや大切な人を失った悲しみ、守りきれなかった命への後悔という形でずっと残り続けるのだ。私にはそのような想像をしても、想像し足りない、いや想像できない程の大きくて重たい傷を抱えている。それでも被害者やその周りの人々はその傷と向き合っていかなければならないのだ。そのようにつらく、悲しい思いをした方に出会ったとき、私はいったい何ができるのだろうか。何かしてあげたいと思うこと自体がおこがましいのかもかもしれない。だから私は、身近に犯罪の被害に遭ったり、被害に遭った人の家族がいたとしたら、むやみに励ましたり、話を無理矢理聞き出したり、被害者の行動を責めるような無神経な言葉を使わ



ず、普段通りの態度で接し、被害者の思いを受け止め、尊重していきたいと考えている。可哀想だと決めつけたり、同情をしたりすることの方が被害に遭われた方にはよほど失礼なことだと私は思ったから。

### 世界人権宣言の第一条に、

「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である。」という言葉がある。その言葉の通り、私達は自由であり、自分の人生を決める権利がある。それを、人の手によって壊されることは許されない。ましてや、他人に突然命を奪われることは私達人間に平等に訪れるべき「死」とは大きくかけ離れていると思う。しかし不平等な世の中で殺人は絶えることはない。それでも減らすことは可能だ。まず、自分の身は自分で守る為の最大限の努力をすることを大前提としつつ、私達は「命」について、思っている以上にすぐ失ってしまうものということと、一人一人の生きる権利を守る共通の認識が必要である。その「命」を守る為お互いを思いやり、尊重する人権意識を高

めることができれば、悲しい事件は減り、誰一人苦しむことも無くなると思う。「命」は目に見えない。見えないもの程大切にしなければならぬ。失ってからでは遅いから。

## 大切ないのち

(茨城県)

坂東市立岩井中学校 三年 古矢 心こころ

「いのちの講演会」。私は、「交通事故の被害」によつて体に障害を負われた橋本隆史さんのお話をききました。

橋本隆史さんは、昭和五十八年七月に事故にあわれました。運転をされていた時、対向車のダンプカーが突然目の前に飛びこんできたそうです。あまりの衝撃に目が見えなくなりまた初めて気を失ったとお話されていました。その後、気がつき目も見えるようになったときには片足を失っていたそうです。衝突してきたダンプカーの運転手は、居眠り運転をしていたそうです。それが原因となり、その恐

ろしい事故にあわれました。

橋本さんのお話をきいている間、私は何度か胸が締め付けられる思いをしました。どうして普通に運転していたのに。何も悪くないのに。私は涙が出ました。

橋本さんは、私たちのためにご自分の体験したとても辛く悲しい、その当時のお話をして「事故」の恐ろしさを教えてくれました。私は改めて考えさせられました。

私は、登下校に自転車に乗ります。また、休日に友達と自転車に乗り出掛けたりもします。ルールを守り色々なことに気を付けて乗っていますが、今までは自分が気を付けていれば大丈夫だろうと思っていました。でも、その考えを改めてそうではなく、思いもよらない「事故」があるということをしつかり頭に入れて、自転車に乗るときは運転に十分気をつけて、また、歩行のときも今まで以上に気をつけることを心掛けたいです。そして一人でも多くの人に自分のできる「気をつける」を心掛けてもらいた

いのです。そうすれば少しずつでも、恐ろしく悲しい「事故」は減るのではないでしょうか。

その後三人で沢山話をしました。

橋本さんのお話を聞かせてもらえたことは私にとつてとてもありがたく思いました。片足を失われたことはとても悲しく思います。その時のお気持ちは私には計り知れませんが、お話をきくなかで私は色々な感情をもちました。また、学びました。そして最後に印象に残った言葉があります。それは「命があつてよかつた。」「今、私は幸せです。」とおっしゃっていたその言葉が私の胸に刺さりました。うまく表すことができませんが「いのち」は何にも変えられないもの、何よりも重く大切なものです。橋本さんの体験されたことを通してずっしりと「いのち」を感じる事ができました。私は両親からもらった命を大切に守ります。また「今、私は幸せです。」とお話されたとき私はとても嬉しく思います。そして勇気ももらえました。私もまた幸せです。

橋本さん、お話をしてくださりありがとうございます。ありがとうございました。

橋本さんのお話を両親にしました。両親は静かにうなずきながら私の話をきいていました。そして、

## 自分の命と周りの命

(福島県)

棚倉町立棚倉中学校 三年

永澤 ながさわ

泰子 ひろこ

先日、私の中学校では「命の大切さを学ぶ授業」というものがあつた。その授業を受ける前は心の中で「暑いし面倒だな。命が大切なことくらい、わかっているよ。」なんてことを思っていた。命が大切なことは今までの人生で数え切れないほど言われてきたから、わかっていた。でも正直、私が今生きているのもなんとなくて、自分の命を大切にしようと考えていることはなかった。

講師の入江さんは、仲の良かった妹とその家族を約二十年前に他殺で亡くされた。そのときの出来事や思いを真剣に話してくださつた。そのお話からは

残された遺族の生きづらさがとても伝わってきた。入江さんは「まさか自分が被害者になるなんて、夢にも思いませんでした。」と繰り返しおっしゃっていた。私ももし自分が被害者になったらなんて考えたことがなかった。けれども、いつでも被害者になる可能性はあつて、もしかしたら明日、被害者になっているかもしれない。そして、もし自分が死んでしまった場合、遺族さえも生きづらくなってしまうと考えると、自分の命ではあつても、自分だけの命ではないことに気がついた。今まで思っていた命はどれだけ軽いものだったのだろう。自分が授業前に考えていたことがいかに軽薄だったのがわかつた。

入江さんは自身の体験から悲しみと向き合い、前を向いて歩いていくにはどうすれば良いかということも話してくださつた。悲しみや怒りの感情は外に出すことをためらう人が多い。でも勇気を持って相談することが大切だとおっしゃっていた。また、相談された人は、話を丁寧に聞くこと、「頑張れ」などのプレッシャーになるような言葉や誰かと比較す

るような言葉をかけないこと、共感して寄り添ってあげることが大切だそう。私は以前、これから先どうしたら良いかわからなくなつて、今すぐ叫び出したくらい追いつめられたことがあつた。そんなとき、ある一人の友人にどんなことを言われるか怖かつたが、勇気を持つて相談した。すると友人は「嫌なことがあつたら逃げることも大事だよ。」という言葉をかけてくれた。私のことを否定しないで、寄り添ってくれた。そのおかげで、少しの間、辛いことから逃げ、そしてまた向き合うことができた。一人で抱え込むと潰れてしまう。誰かに話すことで解決はできなくても、支えてもらうことはできるから、誰かに話すことが大切だ。そして、もし誰かが深い悲しみの中にいるときは、入江さんのおっしゃっていたことを思い出して、話を聞いて、私の友人のように優しい言葉をかけて寄り添いたい。

「命の大切さを学ぶ授業」で私の命への考え方が変わった。私の命が周りにも関わっている。そして、どれほど生きたくても生きることができなかつ

た人がいる。私は私自身の命を守らなければならぬ。また、生きることが辛いと思つている人は自分の手が届く範囲だけでも救えたらいいと思う。話をして寄り添つて、共に生きたい。私の周りの命も守りたい。これからは、自分の大切な命があることに感謝し、周りの人の命も守つて生きていこう。そう決意した。

## 命の大切さ

(三重県)

伊勢市立二見中学校 三年 玉村 琉之介  
たまむら りゅうのすけ

ぼくは先日中学校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」に参加し、交通事故が原因で大切な息子さんをなくされた被害者家族のお話を聞きました。

僕はこの話を聞くまでは、身近な人を事故や事件で亡くした経験はなかったので、実際に被害を受けた方のお話を聞いて衝撃を受けました。残された被害者家族が心に負った傷は一生消えることもないし、大切な息子さんの命はもう取り返せない。亡くなった後も被害者家族は裁判がある度に辛い気持ちで生活をしている様子を目にして、とても辛い気持ちになりました。被害者家族の話を聞いていて、な

ぜ交通事故で亡くなった家族の意見は信用せず、運転した方の意見だけを信用するのか、運転していた方がうそをついているかもしれないのに、裁判ではなぜ車を運転していた方が信用されたのだろうと不思議に思いました。家にある自家用車には、そうなった時の為に前後にドライブレコーダーがついています。数年前、テレビで流れて来たニュースで、あおり運転の映像をみた時、ゾッとしましたが、こういった「やった、やっていない」を解消する為の一つの道具だと思おうし、事故や事件の証拠も残ると思います。けど一番大切な事は、交通事故の場合、カメラをつける事で、運転している人、一人一人が安全運転を心掛けて自分の運転も見られているんだ、撮られているんだと少しでも気を引き締める事を意識できるようになることだと思います。事故が起きて車側にはキズを残すだけかも知れないけれど、歩行者や何の罪もないルールを守っている人達が命をおとす事は決しておきてはいけない事だと思います。

僕も通学や休みの日には自転車に乗る事が多くて、いつも両親に、交通ルールだけは守ってねと口うるさいくらい言われます。

自転車も一つの乗り物で歩行者にとっては凶器です。通学路では朝、小学生が歩いていたり、おじいちゃん、おばあちゃんが散歩したりしています。毎日こういう状況の中で、僕にも何かできないかと考えた時、普段の生活の中で交通ルールを守り、歩行者の立場になって考える事がすごく大切だと思います。けれどいくら僕が一人で考えていても、現実には変わりません。僕たち全員が日頃から交通安全を心掛け、今回の命の大切さを学ぶ教室で教わった、交通事故によってどれだけの命が毎日奪われているのかを知り、僕たち全員が自分にできることを考えることが大切だと思います。

自分の事だけを考えているのではなく、周りの人達の事を思いやり、考える事が命の大切さを考える事だと思いました。辛い思いをされた被害者家族の方がこうして僕達に話をしてくださったのは、私達

全員に同じ思いをさせたくないからだ。僕は思います。僕は今日からでも僕にできる事を考えて、こうした事故で悲しむ家族が増えないように普段から意識して生活していきたいと思います。

## 誰かに相談する大切さ

(大分県)

豊後高田市立香々地中学校 三年 野田 香菜乃

私は今日「命の大切さを学ぶ教室」を受講して、私は命がとても大切なのだと改めて知ることができた。その理由は、私は事件や事故などをニュースで聞いたとき、「犯人は最低だな」「被害者はかわいそう」というような一言二言で話を済ませていたけれど、今日の物語を見たときに、被害者家族の心の苦しみや生き方を考えることができたからだ。

もし私がある日大切な友だちや家族の命を奪われたらどうするだろうか考えてみた。まずは受け入れられないという感情が湧くだろう。そして悲しみ・怒りの気持ちもいっただろう。でも私が一番感じる

のは、後悔だと思う。今日の物語でもお父さんが「父として守ってやれなかった」、お母さんは「あときに止めておけば…」というシーンが心に強く残っている。もちろん悪いのは容疑者だ。しかし、この手で息子の命を守っていたんだと考えると余計に私は悔しくなって自分が嫌いになると思う。

でも毎日は過ぎていく。仕事も家事も学校も行かなければならない。友だちや職場の人に自分を変えなければいけない、がんばって、大丈夫という励ましを言われるたびに気が重くなるに違いない。でも今日の物語を見て私が一番共感した部分は人に相談するということだ。被害者の妹が親友に心の内を打ちあけて妹は初めて泣いた。私も同じような経験がある。私は当時精神的にストレスが溜まっていたときがあった。自分一人で抱えこんでいた。でも私は勇気を出してそのことを友だちに相談した。私は自然と涙が出た。すると友だちは慰めてくれて話を聞いてくれた。そして同じ悩みを抱えていることも告白してくれた。私は気が楽になれた。この出来事を



きっかけに私は人に相談しようと強く思うことができた。

今日の物語でも、お父さん、お母さんはカウンセラーに相談したり、同じ被害者の方と交流して被害者家族は前の生活を取り戻そうとしていた。そして十年後の妹は、犯罪被害者家族として中学校で講演会をしていた。自分が体験したことを人に伝えていた。私も悩んでいたとき友だちに伝えていた。今日の講演会を通して私は、もっと気楽に相談ができる環境をととのえていってほしいと思った。あともし私が相談を受けたら相手の心によりそい、信頼できる関係を築いていこうと思う。



# 【高校生の部】

## 守りたいもの

(宮城県)

学校法人仙台育英学園高等学校 三年 浅野<sup>あさの</sup> 友里<sup>ゆうり</sup>

平成十七年五月二十二日。

私の通学する仙台育英学園高等学校の生徒が、学  
校行事のウォークラリー中に、飲酒運転の車にはね  
られ、十八人が死傷しました。

当時の先輩方は、無限に広がる未来に思いをはせ  
将来の夢に向かい、努力しながら日々を過ごしてい  
たことでしょう。しかし、あの事故によりその全て  
が一瞬で打ち砕かれてしまったのです。その無念  
は、計り知れません。

この交通事故を契機に、平成二十年、宮城県では、  
宮城県飲酒運転根絶に関する条例が制定されまし

た。このような条例は、全国では大分県に次いで二  
番目だそうです。ところが、いまだに飲酒運転やそ  
れを原因とする悲惨な事故が後を絶ちません。

宮城県に限らず、平成十八年八月の福岡県で幼児  
三名が犠牲となった事故を皮切りに、最近では令和  
三年六月に千葉県八街市で小学生五名が死傷する事  
故が発生しています。

このような飲酒運転による悲惨な事故が無くなら  
ないのはなぜでしょうか。それは、「飲酒して運転  
しても、自分だけは大丈夫」という過信と、事故を  
起こした際、命を奪ってしまうかもしれないという  
結果の重大性を考えていないからだと思います。

もし、自分の大切な人が事故の当事者だったなら。  
もし、事故で命を絶たれてしまったなら。その瞬間  
に思い描いていた未来や日常が失われてしまうので  
す。当事者のみならず周囲の人まで巻き込んで。

警察官である私の父には、仕事で関わった遺族の  
方から言われた忘れられない言葉がありました。飲  
酒運転する車両との事故で、家族を亡くした遺族の

一人から、泣き叫ぶわけでもなく、ただ淡々と語られた言葉。

『法律での処罰は、一時の苦しさを相手に与えるだけだが、私達遺族の苦しみは一生続く』

加害者に対する怒りよりも、大切な家族の命を失った悲しみが込められたその一言に、父は返す言葉が見つからなかったそうです。

遺族が生涯抱えていかなければならない深い悲しみを知っているでしょうか。その悲しみ、苦しみを抱える人を一人でも減らすためにできること。

飲酒後は車の運転をしない。ただ、それだけです。交通事故は起こしたくて起こすものではありません。私達一人一人の注意で防げる事故はたくさんあります。

日本の総人口の約三割が六十五才以上という高齢化社会となった今、飲酒運転のみならず、高齢者自身が加害者となる重大事故が多発しています。その為、社会では様々な取り組みが考えられ、高齢者や運転が苦手な人の為にサポートカー限定免許や運転

を支援する装置を備えた車の開発、アルコール臭を感知すると、車のエンジンがかからない仕組みを備えた車など、交通事故を防ぐ環境は整いつつあります。

大切な命を守るために必要な車両社会との共生とは、運転手自身の交通ルールを守るという自覚。

今年の五月二十二日。あの日の事故現場には、多くの花が捧げられ、学校では飲酒運転撲滅をスローガンに事故を風化させまいとイベントが行われました。飲酒運転をしないさせないという輪が広がります。飲酒運転が無くなるその日が来ることを願って。

誰かの命は、誰のものでもないかけがえのない命。その大切な命が、理不尽な形で奪われることのないように。

私は交通ルールと共に、命を守る取り組みについて学びたいと思います。未来の命を守り、そして、繋いでいくために。

## 自分のために、他人のために

(東京都)

東京都立南多摩中等教育学校 五年 有賀あるが葉よう

「命あつての物種」という言葉がある。何よりも命が大切である、という意味の慣用句だ。私たちは学校でも「命を守ることが最優先だ」と教わる。多くの人々が今日も、この価値観の下で生きているのだろう。私もそのうちの一人だ。「命」は常に人々の生活の中に尊いものとして存在している。今、私たちは生きているのだから、当然に命を持っている。では、「命を守る」とはどういうことなのか。私は、岩瀬裕見子さんの「命の大切さを学ぶ教室」に参加して考えた。

岩瀬さんからうかがったお話は、私にはとても悲

しい内容だった。ある日、出かけた岩瀬さんの娘さんは帰ってこず、警察に通報して数日後、娘さんは亡くなった状態で発見された。娘さんはアルバイト先の同僚によって首を絞められ、暴行を加えられ、その上頑張って稼いだお金も盗まれていたそうだが。被害者遺族となつてしまった岩瀬さんたちは、アルバイトなんて許さなければ、アルバイト先を紹介しなければ、と自らを責めた。犯人には極刑を求めたものの、無期懲役という判決になり、今でも悔しい思いをしている。そう岩瀬さんは声を時々震わせながら話されていた。話される姿から、憤り、悔しさ、色々な感情を感じ、聞いていた私も胸が痛かった。当たり前前の日常の中で、突然命を奪われてしまった心の痛みはきつと今でもなお被害者遺族を苦しめている。そう感じた。

「命を守る」ということは、すなわち「周囲の人たちに悲しい思いをさせない」ということだと私は思う。岩瀬さんたちのように、事件後、何年も苦しみつづけている人たちがいる。突然大切な人を失う

痛みを、ずっと抱えつづけている人たちがいる。そのような人を少しでも出さないために、一人ひとりが、「自分の命」「他人の命」を大切に扱うことが、「命を守る」ことにつながるのだ、と私は考えた。

今、SNSによる誹謗中傷が話題になっている。芸能人の方々が誹謗中傷を受けたことによるダメージで自殺してしまったりするような事件が起きたからだ。岩瀬さんも今、娘さんの事件に関することをSNSで発信したりしており、誹謗中傷を受けたようだ。誹謗中傷は心を殺す、と岩瀬さんは話した。「言葉は凶器にもなる」と言われる。無かった事にすることができない、けれども人の心には深く刺さる特性をよく表した言葉だと思う。言葉は、時に人の命をも奪い得る。言葉で人を傷つける誹謗中傷は、「他人の命」を大切にしていけない身近な例だと私は感じた。

私たちは今、色々な情報があふれている世界の中で生きている。ありとあらゆる方向からたくさんの方が情報が行き来し、その中で必要な情報を得ることが

重要となってくる。そうであってもなお、誹謗中傷は続くだろうし、どこかには必ず他人の悪意があるものだ。私たちが、自分自身や他人を大切にするためには、色々な立場の視点から物事をとらえようとする意識と、他人のことも大切にしようとする思いやりが必要だと思う。今一度、自分の行動を見つめなおして、実は他人を傷つけていないかを確かめてみるのだ。こうして多くの人々が日頃から自分を、他人を思いやって気を配ることで、少しでも多くの人々が安全に安心して暮らしていくことのできる社会ができていくのではないかと私は考えた。

自分の大切な人のために、他人の大切な人のために、生きている全員の人々が思いやりを持って行動できる、そんな世の中を、これからの私たち自身で作り上げていくことを目指していきたい。

## 命を守るために私たちができること

(東京都)

東京都立南多摩中等教育学校 五年 長谷川 薫杜

はせがわ ゆきと

日頃、テレビのニュース番組や新聞記事にふれると、犯罪に関する報道を見ない日はない。犯罪が発生したということは、必ず被害者がいることになるし、被害者が亡くなる場合もある。今回、「命の大切さを学ぶ教室」を受講し、大切な命を守るために私たちができることはないかを考えてみた。

私が報道を見て心を痛める事件がいくつもある。まずはじめである。比較的私と年齢が近い子どもが被害にあっているためだ。はじめは昔からあるにも関わらず全く無くならない。はじめがエスカレーターとして被害者が亡くなるケースや、被害者が自殺す

る場合もある。なぜ、人は「はじめ」をするのだろうか。はじめた相手の反応が面白いからなのか、それとも自分が優越感に浸りたいだけなのか。加害者の身勝手な行動で、大切な命が奪われることは、いかなる理由があつても許されない。この現状はそのままにしてはならない。

次に挙げられるのが、子どもへの虐待である。虐待の死亡事件は毎年増える一方であるとの記事を読んだ。親が子供に愛情を注がない、責任を持たないことにシヨックを受ける。虐待により子どもが命が奪われたという報道も目にする。その家族の環境等、複雑な理由があるのかもしれないが、親が子どもを守らなければ誰が守るのだろうか。

悲しい事件が起こらないために、社会には様々な相談や通報の窓口がある。はじめや虐待についても様々な相談窓口がある。しかし、犯罪の数が減らないのはなぜだろうか。より機能させる工夫が必要なのかもしれない。例えば、相談する方法を増やしたり、相談を受ける体制を強化したりして、利用して



もらいやすくすることも必要だろう。また、どこに相談したらいいのかわからない人もいると思うので、多くの人に知ってもらえるよう工夫が必要ではないか。

一方で、すでに存在している被害者のために何ができるかを考えることも必要と考える。報道だけでは断片的な情報しか得られないので、実際に裁判を傍聴することは、理解を深める機会となるであろう。

私は裁判を傍聴したことが無いので、機会があれば是非行ってみたいと思っている。この経験は、社会の現状や現代の課題を考えることにつながる和思考している。「命の大切さを学ぶ教室」を受講した際、裁判が行われたからといって、加害者が必ずしも被害者とその家族が希望する刑になるとは限らないことを改めて知った。確かに、裁判は、被害者の復讐の場ではないが、刑があまりにも被害者の思いとかけ離れていたとしたら、自分ならどうなってしまうだろう。もし、私の家族の命が奪われ、その加害者の刑が軽いものであれば、残された家族はどの

ような思いで人生を過ごすだろうか。そう考えると、被害者の思いを受け入れる仕組みを作り、寄り添うものであつてほしいと思う。

被害者を生まない社会を作るためには、教育も重要である。より具体的な事例を用いた授業を行ったり、体験者の話を直接聞く機会を設けたりと、より心に響く体験を増やすことが、そういう悲しい思いを持てることにつながると思う。

これらのことから、誰もが安全で安心して暮らせる社会を作るには、社会の状況を分析し、犯罪を未然に防止できる取り組みが必要だと考える。悲しい思いをする人が一人でも少なくなる世界をこれから作るのは私たちであることを忘れずに毎日を過ごしていきたい。

## 命を思い出す

(奈良県)

奈良県立西の京高等学校 三年 余<sup>よ</sup> 有果<sup>ゆうか</sup>

私は今までいろいろなものに守られながら安全に生きてきました。命が脅かされることなく生きてきました。それはきつと、とても幸運なことなんだと思います。私が大好きなゲームをやっているとき、勉強のやる気が出ないと嘆いているとき、この作文を書いている今でさえ、日本のどこかで、誰かが事件や事故の被害に苦しんでいるのだと思うと、何だか「命を守る」という目的が、途方もないことのように思えてきます。どうしたら少しでも悲しい思いをする人を減らすことができるのか、私なりに考えようと思えます。

そもそも命とは何なのでしょう。私たちは普段当然のように生活をして、当然のように生きています。私たちは当たり前のように命を抱えています。当たり前すぎて、私たちはその尊さを忘れてしまっている気がするのです。人間は日常にあるものの重要性を忘れがちです。非日常に身を置いた時、手遅れになった時にようやく思い出すものなのだと思います。

命の危機に直面する時、ようやく命を思い出す。命とは、当たり前なものではなく、その一つ一つが尊く、奇跡そのものであると考えます。そのことを、常日頃からじゃなくても良いから、ふとした瞬間に思い出してもらいたいと私は思います。そのために、私たちはキツカケを得る必要があると思います。人間はある程度衝撃のある出来事がないと考えることができなからです。そして、私の経験の中で、一番キツカケになると思ったのが、学校での活動の時に知った「生命のメッセージ展」でした。事故や事件によって命を奪われた方々へのメッセージや、生前に履いてい

た靴、写真などが添えられた、亡くなられた方々一人一人の等身大の人型「メッセンジャー」が展示されるその活動は、私の心を大きく動かしてくれました。

白状すると、私はあまりこういった活動に興味を持つことが少ないのです。そんな私がこの「生命のメッセージ展」を知り、触れていくことになったのは、前述の通り、学校での研究活動の時でした。同じ研究テーマをやるグループを探す時に声をかけてくれた友達にその存在を教えてください、興味を持った私は、「生命のメッセージ展」に関わらせてもらえることになりました。その中で私は、メッセージ展を見に来た方々の感想を読みました。それらはどれも、「生命のメッセージ展」によつて命について考えてくれていたものだったと思います。少しでもいいから、命の尊さについて思い出す時間が、私たちには必要であり、それを作り出す力が「生命のメッセージ展」にはあると感じました。「生命のメッセージ展」の他にも方法はあると思います。様々な方法で、人々が命について思い出す時間を作

れば、悲しむ人は減ると思うのです。それは、わずかな差かもしれませんが、それでも、それは重要な第一歩です。

私はこれらの活動を通して、人々の思い、悲しみ、そして必死に歩いている姿を知りました。これはきっと、私にとって貴重な経験になるでしょう。普段の考え方にも少し変化があったように思います。例えば、交通事故に遭わないように、自転車を運転する時は、周りをしっかり見なければいけない、スピードを出しすぎてはいけないということが、運転中に思い浮かぶようになりました。その程度なのか、と思われるかもしれませんが、この考え方の差はとても重要です。このような考えを多くの人が持つてくれれば、不注意から来る交通事故は減ると思いませんか。人の考え方、意識の変化はとても大きな要素なのです。私は、社会が命の大切さを思い出し、人々の普段の意識が少しでも良い方向へ変わっていくことを願っています。その為には、「生命のメッセージ展」のような命について考える機会が必要だと考えます。

## 「命」を守るということ

(高知県)

高知県立高知丸の内高等学校 三年 濱田 あいみ

大切な人にもう二度と会えなくなったら…。

先日私は学校で「命の大切さを学ぶ教室」で当時  
高校二年生の三浦伊織さんを交通事故で亡くされた  
母由美子さんの話を聞いた。今まで私は「生」や  
「死」について深く考えたことがなかった。「生」は  
今私が当たり前のようになっていることであり「死」  
は私にとって遠い未来のことであると思っていた。  
私はよく「命はこの世で最も大切な物なんだよ」と  
言われてきた。が、なぜ大切なのか。そう質問され  
ても答えることはできなかった。しかし今回の講演  
で由美子さんの言った言葉

「伊織は物じゃない。だから何者も代わりにはな  
らない」

この言葉に私の今までの疑問である「なぜ命は大  
切なのか」の答えが見つかったと思った。命は物  
じゃない。私そのものなんだと。私には代わりがい  
ない。だから命は大切なんだと。この言葉に「命」  
という全てが詰まっているように感じた。

人はいつか死ぬ。それは皆同じことであり避けら  
れない運命。ただいつ死ぬかは分からない。明日か  
もしれないし今日かもしれない。生きられる時間は  
皆違う。今回講演を聞いて分かったこと、それは失  
わずに済んだ命があるということ。伊織さんには明  
るい未来があった。それを相手の身勝手な行動によ  
り一瞬にして伊織さんの未来も家族の日常も奪われ  
てしまった。大切な家族を失ったら私ならどうなっ  
てしまうのだろう。きつと耐えられない。家族は私  
の一部であり一人でも欠けると私は成り立たない。  
加害者の方は懲役十年だそうだ。十年経てば加害者  
の方には日常が帰ってくる。しかし被害者の方には

日常が帰ってくることはない。そのことに私はどうにも納得できなかった。

三浦さんは辛い過去を私達に伝えてくれた。話すということは最愛の息子の死について語らないといけない。どんな気持ちで三浦さんが語ってくれているのかしっかり考えて聞かなければいけないと思った。

「人はいつ死ぬと思う？心臓を銃で撃ち抜かれた時：違う。不治の病に侵された時：違う。毒キノコのスープを飲んだ時：違う！人に忘れられた時さ」

この言葉はあるアニメでその人物が死ぬ直前に言った言葉である。人は人に忘れられた時初めて死ぬ。伊織さんが亡くなって約十年。時間が経つにつれて社会は忘れてしまうだろう。忘れてしまうから同じ悲劇が繰り返されてしまう。私は決して伊織さんを忘れない。そして私もいろんな人に伝えることで伊織さんの命をつないでいきたいと思った。

なぜ飲酒運転は減らないのか。それは自分に対する過度な信頼があるからだと考えた。実際加害者の

方は過去に何回も飲酒運転をしていたそうだと。一回やって事故にならなかったから大丈夫。」そんな何の根拠もない自信により今回のような事故を招いてしまったのではないだろうか。

「事故は危ない」、「事故には気を付けよう」皆そう言っているが、果たして口だけではなく行動にできているのだろうか。改めて今までの自分の行動を振り返るとできていないと思う。そんな人も多いのではないだろうか。社会のルールは守るためにあり、ルールを守ることによって命を守ることができ。自分の命を守るために、そしてみんなの命も守るために。まず自分が命の大切さ、交通事故の恐ろしさを理解し、家族や友達に伝えていこうと思っただ。そうすることが生きている者の使命だと思うから。





